津駅周辺空間の基本的な方向性（案）

津駅周辺道路空間検討会

背　景・必要性

現在の津駅周辺空間が形成されてから約半世紀、新型コロナウイルスや少子高齢化、災害の頻発化・激甚化、交通ネットワークの進展、AI をはじめとしたデジタル技術革新の加速など、今、時代が大きく変化しています。こうした状況に対応し、10 年後、20 年後の未来を見据えた更なる発展を実現するため、津駅周辺空間を新たなステージへ進化していく必要があります。

地方都市が主役のポストコロナ時代において、みえ県都の顔となり、地域の活力を引き出し、災害にも強い空間へと再生するため、津駅周辺空間の基本的な方向性を取りまとめました。

課　題

（1）街づくり：もっと近代的で、県庁所在地らしく

津地域の満足度評価では、「商業の振興」や「都市機能の整備」について、不満度が高くなっています。また、津駅周辺を「活性化してほしい」など津駅周辺に対する市民の声が他にも寄せられています。

（2）防災：高潮・津波で浸水する予測

駅東口では高潮時に約２ｍの浸水が想定され、避難場所や帰宅困難者の受入れ拠点整備、鉄道の代替としてのバスの活用等を図る必要があります。

（3）交通：車の減少・歩行者の増加、バス停の点在

駅前の６車線の県道は、自動車交通が減少する一方、歩行者は増加しています。また、路上には路線バス・高速バスの停車場が点在しています。

（4）東西軸：駅舎を自由に通行できない

駅の東口と西口を往来する場合、駅舎内を通行できないため、地下通路、横断歩道橋、踏切道を利用して、迂回しながら通行する必要があります。

（5）回遊：駅周辺の案内がない、夜は暗い

駅周辺には案内板等が整備されていないため、来街者には分かりにくい状況です。また、中通りに入ると夜は街灯が少なく暗い状況です。

基本的な方向性

1. 公共交通の利便性の強化　浸水等の災害時の対応の強化

交通結節空間をリノベーションすることで、公共交通の利便性の強化を図るとともに、災害時の避難場所や帰宅困難者の受入空間として活用するなど防災機能の強化を図ります。

2. 歩行者の賑わいや滞留機能の強化

道路空間の再編による歩行空間の拡張や、占用の緩和を通した民間利用の促進などにより、新たな価値を創造し、歩行者の賑わいや滞留機能の強化を図ります。

3. 東西連携の強化

駅の東口と西口を直結する東西自由通路の整備などにより、東西歩行交通の円滑化や駅利用者の利便性の向上に加えて、新たな人の流れを作り、東西地域間の交流の促進を図ります。

4. 駅周辺の回遊性の強化

ICT を活用した分かりやすい案内看板の設置、植栽や美化活動の協働の取組、街灯の充実などにより、来街者が安心し楽しく歩ける環境を整え、駅周辺の回遊性強化を図ります。

官民協働によるマネジメント・ユニバーサルデザイン・デジタル化・周辺地域との連携

ソフト・ハード一体となった取組みを進めます。

- 民間のアイデア、ノウハウ等を積極的に取り入れた、官民協働によるマネジメント
- バリアフリーをはじめ、多くの方々が利用可能なユニバーサルデザイン
- MaaS やスマートシティなど、交通や街づくりと一体となったデジタル化
- 津駅周辺と新町周辺など近隣地域との連携、県内各都市との連携

新たな技術や仕組みを積極的に取り込みながら継続的な進化を図ります。